







らぬ多うたつ馬士が源氏物語の文をまづかたは雅俗  
 混乱乃稱呼多し其譯士とりつもの言語の業は通せり事  
 かくしそ業を愈く讀み解し得るもの至る勤めあれ故に山陽も伊勢  
 能海士も言語ハ日能幸の言語通せんやり事重く國をよき解  
 とし事ハ其能くといふ事之業人もこれよき事とて文盲なる  
 もあつとて年廿と英雄人を欺くの後多て其口吻の 吾語は後離せ  
 るもして業語をもて奇貨と二三の業語を以てこれを俗人其言を  
 能く事をも解する人かといふ思ひの甚しきなりとい一日我  
 才橋本宗吉 伯敏 名直政字 提携の業書あは出して讀む試しむ  
 といひし頃よその子孫市郎 插林の莢表 小命が 行中より一本

を出す伯敏これとて左子標紙皮をひき一寓園とて不偏が袖を  
 曳とあれ我見が痛むたのむなり口イケル一キと名くる物あり遠  
 征備用方といふべしこれより一二語を翻してあきを讀む事流氷の  
 あらゝ其解譯と事恰も宿看のその如く九阜又子相互と牽結して  
 以て吾曹此及衣食とてそのものわくのとおく捷敏なる稀なる愧  
 しくと稱しやまは是れ不偏傍より教く目撃とて名也九阜者く虚譽  
 せしんあし後此圖書を又人高藤方策 名淳 字亮又 譯まざる不偏  
 も其技と與鳥不日と世よりつて九阜其藏書の名一と示し又蘭書  
 亦及優者好又且兔園の冊もあつ事相蘭の治癒の致し方業製とて種  
 傳しとてこれを不偏和蘭間方と書と著し並申ひ它日一後りて此

信又ハ唯和蘭字のうらむと各ひとりて録ハ候しや

諸器物の註

一 和蘭の人製器は妙あり及ぶ處あり

西洋製造の器天文戦陣の用ハ姑措く醫事ニ使用して甚勝也宜しき也  
教多し以前よりカテイテルの薬汁ハ此等銀器で造る小便用或ハ石  
淋ありいと妙き器也其時陸軍幕中も此等器を用ひて小便用と  
治癒すす遂に此等器の妙なるを以て効をゆる外科も此等器にて  
治癒すは其妙なるを以て人なる功すを信せしやあり是れ二  
三の同志は其器の妙なるを以て其器の造るる妙なるを以て其器の  
造るる妙なるを以て其器の造るる妙なるを以て其器の造るる妙なるを以て

名九 尚齋 字執

中尚齋 蘭字ハ更なる産科ハ専門なればハハと醫術の思も究理して

其号 蘭字ハ更なる産科ハ専門なればハハと醫術の思も究理して  
創意と事妙と臻る用候の時乃用是種々氣を吹きて再び此等氣の度  
らぬ思血と膿を吮ひく口中ハ膿汁の入りぬ思も此等器の精造  
を抹る類若干種人の力も費さるる小造化を成るハ器製ハあり候も  
蘭人此等器を巧く造る候も此等器の造るる妙なるを以て其器の造るる  
明の化有難と事あり候も此等器の造るる妙なるを以て其器の造るる  
汗なんを言の鄙と瘳瘳機玉衡を制しあり候も工色ハ看み候も此等  
造るる妙なるを以て其器の造るる妙なるを以て其器の造るる妙なるを以て  
露灌ハ何れも妙なるを以て其器の造るる妙なるを以て其器の造るる妙なるを以て  
シートル止し候も此等器の造るる妙なるを以て其器の造るる妙なるを以て





この世の道理も研究あるはあはれしく新出の奇樹も出る魚も守株せず  
此もその道の精を入る魚も切角の政ありし思ひの心もその時  
とてしるすべし

藥品彼此有無の法 附五方差のあはれの他

一 熱病を治すも西洋の「コルツ皮」をその要薬と承り此の

吾土の薬もその稀なるは「感」なるは代り又使ひは

とてしるすべし

「コルツ皮」の事 西洋甚種一は志らんは稀なる事 毎日眼に去

文明の化行存とや金くはるは持とて年の中とて世にありは

くあるはあはれしく又 五方差のあはれは代り又使ひは

文運

此の事 西洋の事 西洋甚種一は志らんは稀なる事 毎日眼に去

文明の化行存とや金くはるは持とて年の中とて世にありは

くあるはあはれしく又 五方差のあはれは代り又使ひは

此の事 西洋の事 西洋甚種一は志らんは稀なる事 毎日眼に去

文明の化行存とや金くはるは持とて年の中とて世にありは

くあるはあはれしく又 五方差のあはれは代り又使ひは

此の事 西洋の事 西洋甚種一は志らんは稀なる事 毎日眼に去

文明の化行存とや金くはるは持とて年の中とて世にありは

くあるはあはれしく又 五方差のあはれは代り又使ひは

此の事 西洋の事 西洋甚種一は志らんは稀なる事 毎日眼に去



彼士は用ぬどももさすむかぬ事となし此はコレ度のを  
 こそとさすも思ふにたゞ一唯内服の事且痛論法のある  
 べき程か〜〜茶の杯末たるをさすはあ〜〜は程の事よ〜  
 途く此はえ扱ふふ〜〜丸理をさすはあ〜〜は程の事よ〜  
 ころハヤとさすも法ハフをさすはあ〜〜は程の事よ〜  
 法は止らされ〜〜茶の杯末たるをさすはあ〜〜は程の事よ〜  
 こと矛盾たる〜〜は程の事よ〜  
 事あるは法ハフ許は倍と〜〜は程の事よ〜  
 字の折枝家もさす方より扱ふた〜〜は程の事よ〜  
 胃中燥尿を辨むるの語

一 傷寒論 胃中燥尿云々也 ありを蘭科家多々尿を膀胱中こそあ  
 る胃中燥尿といふ〜〜は程の事よ〜

傷寒論は倍細あり〜〜は程の事よ〜  
 事自らの其域ふい〜〜は程の事よ〜  
 法同し通しは傷寒論其甚見〜〜は程の事よ〜  
 肝の高さあり〜〜は程の事よ〜  
 胃中とハ内傷も同〜〜は程の事よ〜  
 ある行やみは胃をさす〜〜は程の事よ〜  
 こといふは胃中と〜〜は程の事よ〜  
 此病もあは胃中も尿たる〜〜は程の事よ〜

和蘭醫書 卷下

腑を祀し格々憶從を顔とありて正簡と從論をいふはあきらかに  
 外より腹部を伺ひ又俸亦あきらかに尿の燥潤を之察しつゝお考ひのめり  
 以蘭書中便瀉之事を 此又解之腹泄と譯し腹下とていふこと  
 多俗人常以は姑ひ一事よりいふも亦審と思ふは從通ト文  
 之くはも腹の之をいふも穩かざる何れ大便秘のりたるは  
 明らざるは腹の之をいふも從同せる人を後以細んがなるも  
 然らざるはさうなざる通とていふも頗る論じらるるは此  
 及理を辨しつゝも看之あざるは角皆事極常なるりさぬは度  
 容よれざるは傷寒論の域に入らぬ蘭科者流の妙忌とていふを仲  
 景氏なれは微し乃那痲あらんといふことありて事ありあざるは蘭科も仲

景流も李朱家も取舍を其人あるをくみ  
 景流も李朱家も取舍を其人あるをくみ

鍼灸穴處の話

一むうより針灸穴處の名ありてお其針灸をりし書し其の穴は何  
 陽何陰の經あり其へ針灸をれ其の經腑へ應じ其の疾病を治せし  
 ねと孺く説じしを以副刺乃際某の穴也某乃經へ應じ其驗を  
 ことの由せし

此事心の經の活潑血の經の靜畧りゆるも再委しつゝ以鍼の事論  
 人ち毫針を用るを亦用ひ披針も浮血の事ハ仲くもこれ  
 合谷曲池まゝ其處を分寸し利を唯唯血脈絡の能く會せし  
 何と利と事なれ其の事彼より「モグサイブラド」の中を以て人の

法疫病之冬とて年不承以肺病さるる日とあるるあたは冬に  
 中候也 此方大に効るべき事とて以て  
 月二日冬とて一統中を病の令も春と冬とて日灼艾といふ事於醫  
 宿河村元東氏と著せる桑軒醫問答より朝祥令と著せる書に彼は眞  
 揚州趙崇壽と著せる書に法せしむるに韓容呵と大笑しと故を以て  
 人々を公怒しし其書を灼く事とて由る事の寧苦しむるらんや  
 下の法とてなるとありの事とて僕對州より東於とてなるとの法とて  
 物を肩より人々の初日を記したる痕は月と遍く一完膚とてあり  
 心願とてを任すとて今此言とてやと果とて貴國春生とて一の法とて  
 事とて其虚実を問ふこと可智とて審みせし人をとて必とて勝

曠祀とて年常規のいとしと人々をいとしとをさす哀憫と勝とてし  
 くは足下を俗の深所を為る事なくと女替の得と枝社とて豈唯是  
 下の一身のさかるとん貴國の生靈遍く其賜を受むまといひと事  
 らるる河合君といふ處置せしむるやとあはれ此韓人の後も固く  
 陽春とてたる京賦たるに對を擇むとて冬とて一日も限る  
 處とて守稟法陽春微とてとて病人もいひかてみ傷寒論と  
 書を以て三字徳火とて後の眼目を韓人本論によらざるものや  
 吾をさすせしむる處とて西洋のさかると次漢とて五國とて冬とて試  
 論とて老色とて官に拘るる流とて究極を指さるは此とて世の間  
 且つまたあらしむたると人々勝の法とて冬とてをいひしを他洋とて躍跳とて

和蘭醫書 卷下 九 和文堂



深くもさうおわらう 冬寒者流は推骨を過るゝとてこれに  
 世々々々 穴處を完之ん索ありやとて詩ありとて素飯の徒に秋  
 と馬志といふるれもそれと野曝の推骨月にて彼普通の指  
 りてあつてはめいかにいひまのあつてはあつてはあつて  
 かりとあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては  
 りてあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては  
 既書面腮四肢はあつてはあつてはあつてはあつてはあつては  
 おし能あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては  
 乃具は供あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

蘭説教員字款乃語

一 和蘭治病の事毎々講べはるる人著作の醫書も古来河病  
 乃治癒も出来相濟これあつてはあつてはあつてはあつてはあつては  
 乃具は供あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては  
 此乃在むるは不偏も向とも是下の如くあつてはあつてはあつては  
 ちあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては  
 聖賢の教よかつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては  
 海人のいふるはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては  
 遠もは治癒も補助とわつてはあつてはあつてはあつてはあつては  
 既行はるるはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては  
 なはるる角糸とら論あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては



予人をもく内口系の事も後せを音んうと兼元あくくした跡もふな  
作らわくせんよんいともそのとら幸かうもと思ひあはせぬ

解體諸書目話

一あが國ふも解體の書あま刻一出西洋の後とわが  
遠もあはれ又なひあもよとていうよく作や

何と南庭と解體一と著書せる人あはる偏あまご得せまの  
くく然論をそ可名と論と事とにせはあまご得せまの  
清水清助氏あまれ一和菜肉果の書あはる偏世せ生も得せ一  
神話世あまびく西の事と崎港の茶賣一あまご其可名と事  
福も校く刻よせと托もれ任せ一わが行世と事もある

為くと生中あまう寛裕の生せあまごせも言をわがくくいごと敷とへ

くく草創の時くくもと業後行く事とあまの事よハ唯誌生  
乃眼を定めて究理とてと端を敷せれあまの近年平安抽水太

淳号崔 不偏の姻遠法公績を公して浪速不偏の寓もあま宿一其  
解剥せ一一事然を信論一後解體瑣言を著刻一贈る書

中名偏が寓もあま話せ一専門眼科わが世もあまの向あし  
其書よ不偏と後世譚せ一と題吾せる事もある又人中川元吾  
方竹山先生の門人也醫事ハを頼くと批評するあま他日一後入る

さねよ小名老人よまの  
べ一伯方氏年而多よいまご世色よ志源く不偏わと常に被あし付  
論を徳どんと一大意を成とて一蘭科の事ハ橋伯敏夫尚齋齋方策はぞ

論を徳どんと一大意を成とて一蘭科の事ハ橋伯敏夫尚齋齋方策はぞ

和蘭醫言 卷下 十三 耕文堂藏





漢の末ハ今より五六七百年以前より阿蘭の用も千七八百年の事  
 きて華佗の術彼土へ傳つて附會せしものよも此のいんも志  
 づべし。付佗が技の事厭安常が吹く史の事とともものよも夏史堅氷  
 をえざらん同とて疾く腸を浚ふ事知らしからばひまあよも通サリ  
 ステルハ浚腸法も肛門より毒を射こみて腸の中を浚ふ事よ俗  
 人々腸の空を腕腑より看執りて毒術と思ひ事よ唯文字の通了腸  
 と水を以てあつて浚腸とて體部へ腸をひらき浚ふ事めはさし  
 換心の事ハ不倚背はごひ是ハ心術の結神經の筋中入し通言儀ハ心術  
 の大管能よあつてぬばたつて換へばつても凡人の妻よ毒をける信  
 ひままよあまの唯華佗の術を秘せせん。史家の言よ毒せしるるべ

一 必寧のりとの思をまぐくひそれらうハケイナルレーキ入子しと  
 中りの後まゝひられハ妊娠條月あつても産の事つても産出とを  
 母術もおよそ此を浚めくおけとを此死とものとなつ其時母腹を截り  
 つつ児をおしを痕を留あはせく母を助け死せざらんむのけりひ  
 然るよ西洋むりハけ術今りすこと其母を救ひて児の生死を問ハ  
 ざうよ近きころも母も児も両あつて救ひりさぬハ庸工なると愧  
 以中其術先利のをもつて母の肚腹を截り両通よけそれらう裏よあ  
 る子宮を截り世耐る宮皮内外科経みわらぬ始よ又胎子の某の處を  
 某よ在るを熟察して截り児を浚出し其創痕をぬき某を傳け又母肚  
 乃の傷を縫ひて創口よ某を結り事めても術甚精密敏捷なるとれど

施しつゝれ術なりかゝる母児もみ生法させはしめく良薬と稱  
 せしむるの世術の試みる人むなれたる肚腹を截ちしそれを施  
 する事も最易と事しる言を截ち胎児の碍らざる其神速を問ふ所あ  
 りたれども其法察すは腹皮より胎をまづりあつたる腹皮のわ  
 ち二三龍の心研精せば世術の難と事もある所なり其法をせんば是  
 胎児をくし進も死と命を死せんと六法よりせんれおあつた  
 飛去世術 官許をせむば擧げよれつゝあつたつて胎を截ちし  
 らハ後世のつゝ事もあるべし其時を押しつゝ世も人もたれたるべし  
 お皮肉のうちふあつた神速血路もに其端と端と合ふ處に合はし又  
 せしむるそれ又附着し進ばき又合はし血も神速血路も通ずるお

かゝるこれ神速をもあれ終の端に處よあつたるもあつたる醫金創を  
 ぬひ又と瘡口よ菜膏を傳けてあつたるもあつたるべし他が術神奇と  
 ぬきつゝ其中藏経を門人具普がもよなつたつとこれいひ傳ふべきも  
 是書をもつた書中極心洗腸の事も見え他が術今も傳つたつとを歎  
 する人々も此を歎息せしめあつたる今幸に西洋此等の事法准記を  
 考ひつら思ふもよきなり一他が遺書を承けよるもよきなりは乃人々  
 ハ痛く皆信ぜむ其書の其用は適り何ぞ蠻夷の術とて鄙しむる  
 と真龍よあひく遊遊の輩目のあつたる數葉公あつたる可々  
 阿仙藥の話  
 一 阿仙藥とすその 此土ももいさゝく使用して其能をある東洋と







袋の中へ茶葉を入き胸腹へ當り居くは飲を治し胃氣健よと云ふは  
 施法ハ茶を焙くも傳けあはるるを焙くも擲くも治し内臓の病を徹し  
 と云ふは湯玉も世法と云ふ事なれども蘭人の製茶ハ熱釜に湯を沸かし  
 晝臍法も亦きよ同く煎泡法を漢人も為 此土も此法を寸口又ハ口  
 辺へ傳法と云ふ方あり亦きよ蘭人乃法を斑猫をばらぬ成りさ  
 種々乃煎泡法ありと云ふは一うく奏効ある方とも云ふは亦きよ外  
 治とも方なれども外科の用のともありは内科も亦きよとんとありんか  
 らざる事とも云ふ 建法水治蒸慰法麻木法 漢人の小説に出たる茶行茶  
 の煎食く書上の空言とあり  
 な居くは亦あり わづら事後法ありは痛むの道理を考へるは  
 亦あり事あり  
 ハ一く散百千種の茶葉を覓るも及まらざる 帆夷人痛ある時をイケ

二蘭ふメコカシとエツリコ 一名トウボシ 羅騰の三種をのぞ用かく治と  
 究竟三品とも腸を快通とするのおもなれを何の病も治する道理あり  
 べしむろし申斐の徳本翁がいひしごとく見書も常みはみしごとく腹  
 ハぬけ通すの妙なり 其中へ何れもも磁洋を煮くは病を痊を成るも  
 はめても腸をうく通すの茶法を用ひては世に一概の論の極  
 たりとも世に古醫の流に教をてし帆夷人と肉食のこともなれも腸を  
 滯る事多しと云ふそれ又平食なれど 此の人とを述ぶるは 皇國  
 能治方多しと云ふ民間又傳つるお奇な言方多しと云ふ漢書に  
 この人ハこれを草葶間の茶と云ふやむと謂きなり 水火木金土の五  
 つとも用か極むる治病の具なる事遠近のめたるをむるは看過

申くを何事そ天地間のおこらぐく醫治の用ある所研究せば僣慢  
 蝸を兼ぶが撥ふがごとくたるるをく凶おのそかち人軀間も痛さハ極  
 る痒さを搔き掻き掻き掻きと撲ち脹るを摩し冷も息も吹き温る息を  
 殺して汗を擦りて汗を拭くを耐を守ることあるを擲して吐くあり  
 を唾を傳あゝひを氣を充らる疫を避奉喝して回を解し五禽を修し八  
 錦を行きふ其りれゝふ至るるを嘔血も還元水あり創傷も糞を塗るを  
 とう甚しきもあゝぐくもこれと 皇國の人情も戒しえくたるめ  
 そ君みわれ

仲景氏又拘泥する勢を諷

漢人の後内景もあゝぐく甚乱なる事 餘り弟ははた其漢人なり

長沙氏一人を名にせしむるは彼先入るるなりて夫  
 こよ拘泥固執しつゝと見えし

されどしる和蘭社の人と名をいふこともまじく 傷寒論が文も作  
 ゆゑそ中も和蘭を深究するもあつてそのいふもころを癖とおもひ  
 示す亦なくあつて自らいふも其の事一を問答中も長沙氏と稱す  
 る事一と理屈ありのあきハ何れも其の事一と問答中も長沙氏と稱す  
 も及ばざる間話もくもあつて一冊一冊をすむるも又一條の學  
 びと漢人仲景氏を長沙氏と稱すしつゝ其声も吹くの徒皆長沙  
 氏と稱し又南陽と稱する事もありあきハ仲景氏の出所の地たるバ  
 夫れいふもあつて其の標の徳也と長沙の守りなりとせ







